

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Survey on switching between dialect and standard Japanese in Tsuruoka, Yamagata Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾崎, 喜光, OZAKI, Yoshimitsu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002166

山形県鶴岡市における「場面差調査」

尾崎 喜光

(国立国語研究所)

キーワード

山形県鶴岡市, 方言と共通語の使い分け, 継続調査, 場面差調査

要 旨

国立国語研究所では、山形県鶴岡市において、方言の共通語化を主たる研究課題とする調査を、1950年（昭和25年）、1972年（昭和47年）、1991年（平成3年）と約20年間隔で多数の市民を対象に継続し、その間の共通語化の進行状況をとらえてきた。しかし、方言／共通語を用いると判定された回答者も、いつも方言／共通語を用いるわけではなく、会話の相手や場の改まりの度合いなど広い意味での「場面」の違いにより、方言と共通語を使い分けていることが予想される。そこで、第3回調査の翌年の1992年（平成4年）に、場面による使い分けの状況を見るときともに、「ふつう何と言うか」と問うことにより日常的な場面を想定させて求め続けてきた過去3回の調査結果が言語生活全体のどの側面をとらえてきたかを検証するために「場面差調査」を実施した。分析の結果、さまざまな言語要素において使い分けがなされていることが確認された。

1. はじめに「場面差調査」の企画―

国立国語研究所は、設立以来、国民の言語生活の実態を把握することを重要な任務のひとつとしてきている。これは、言葉そのものを直接的に研究対象とするのではなく、毎日の生活の中で日本人が言葉をどのように用いているかという観点から言葉（日本語）をとらえようとする研究と言える。

生活の中でどのような言葉を用いるかは、言葉を取りまくさまざまな社会的環境と密接な関係を持つ。このうち昭和期以降の変化として注目されるのは、交通手段や通信手段の発達であろう。これにより、各地域に住む人々は、生まれ育った地元の言葉だけでなく、さまざまな地域の言葉に直接的・間接的に接することが日常的なこととなってきた。その傾向は現在でもますます進行している。このうち通信手段の発達という点で言えば、音声マスメディアの普及に伴う共通語との接触およびその結果としての共通語化という現象が注目される。もちろんそれ以前も、新聞・書籍・雑誌等を通じて共通語に接することはあったが、大正14年のラジオ放送の開始、昭和27年のテレビ放送の開始以来、話し言葉としての共通語や、その土台である共通語音声そのものに日々接するという環境が生まれた。

こうした時代になると、地域社会で使われる言葉は地元の方言だけでなく、接する機会の多い他の地域の方言や共通語も同時に使われるという状況が予想される。特に共通語は、全国いたるところにおいて、方言との併用の形で用いられることが十分考えられる。

これを図式化して示すと図1・図2のようになる。

これはある地域社会における言語の状態を表したものである。図1の白一色の状態は、方言のみが使われていることを示したものである。これに対し図2には黒い部分が現われるがこれは共通語である。上記の社会変化を受けて、方言のみが使われる図1の状態から、方言と共通語が併存する図2の状態へと変化したことを示している。

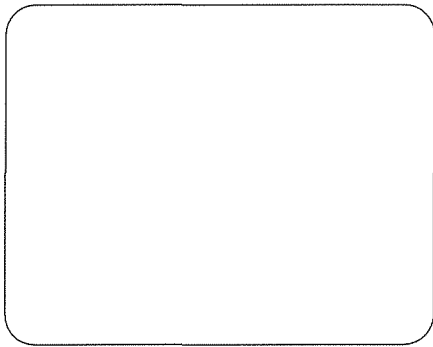


図1 方言のみ

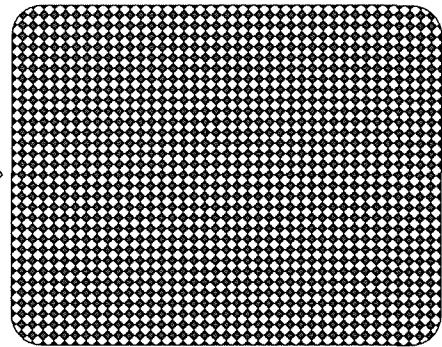


図2 方言と共通語が併存(1)

共通語がどの程度浸透しているかを把握することは国民の言語生活の向上を考える上で不可欠であると考えた国立国語研究所では、設立まもない1949年（昭和24年）に、福島県白河市をモデル地域として選び、多数の市民（635人）を対象に共通語使用を測定する調査を実施した（国立国語研究所 1951）。

その後、白河市で得られた知見が他の地域でも同様に認められるかを検証するために、翌1950年（昭和25年）には、山形県鶴岡市において、多数の市民（577人）を対象とする同種の調査を実施した（国立国語研究所 1953）。

この鶴岡市では、その後、約20年間隔で同一項目について同様の調査を繰り返した。これにより、単に特定の時期における共通語化の度合いを明らかにするだけでなく、年を追うごとに共通語化が進行するありさまをとらえることに成功した。1971年（昭和46年）に実施した第2回の調査結果は国立国語研究所(1974)で報告している。1991年（平成3年）に実施した第3回の調査結果は、全体的な報告書は現在準備中であるが、その中間報告である Yoneda(1997)によると、例えば図3の結果が得られた。これは、共通語化を測定するための項目群のひとつとした音声（分節音）に関する31項目について、共通語音声がどの程度用いられているかを、過去の調査で得られた結果とあわせて年齢層別（生年別）に示したものである。共通語音声と対立するこの地域の方言音声には、非語頭の無声子音の有声化（「柿」をカ^レのように発音）、セ・ゼの口蓋化（「背中」をシェナカのように発音）、母音イの中舌化（「辛子（からし）」をカラスに近く発音）などがあるが、20年間隔で年を追うごとに共通語化が進行する様子が、また若い年齢層にバトンタッチするような形で共通語化が進行する様子が明確に確認される。

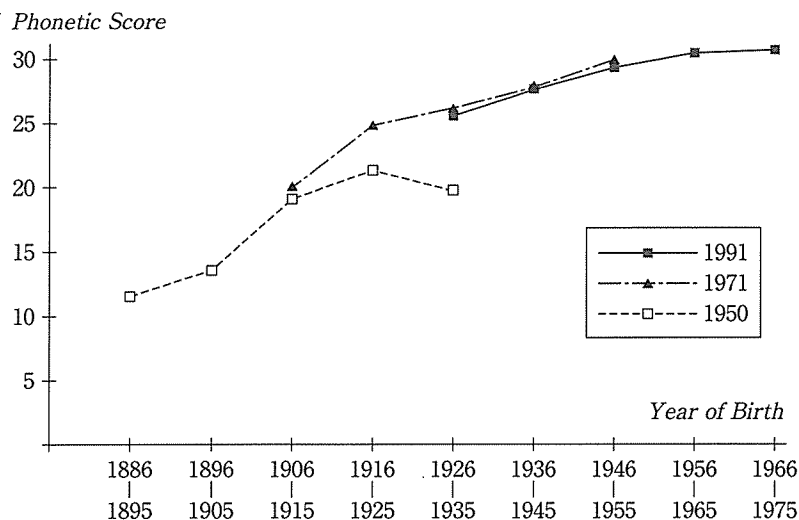


図3 共通語音声の得点（満点＝31点）

こうした継続調査により、先の図2において黒い部分が増加していく様子をとらえたのであるが、方言と共通語が併存するこのような状況においては、使う言葉がもっぱら方言のみとか、あるいは逆にもっぱら共通語のみという人はじつは少なく、方言と共通語のバランスはさまざまであるにしろ、多くの人々は方言と共通語の両方を持っているという状態がより現実に近いものと考えられる。つまり、地域社会全体として方言と共通語が併存しているばかりでなく、地域社会の構成員である個人の中にも両者が併存しているのである。これを示したのが図4である（丸は個人）。

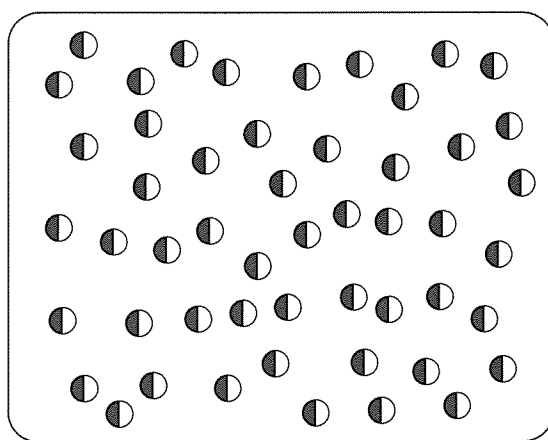


図4 方言と共通語が併存(2)

こうした個人が、実際の言語場面で方言と共通語のいずれを使うかはランダム（無規則）というわけではなく、家族とくつろいだ場面ではおもに方言、知らない人と話す場面ではおもに共通語というように、会話の相手や改まりの度合いなど広い意味での「場面」により両者を使い分けられていることが予想される。過去3回の調査は、地域社会全体として共通語化がどのように進行しているかが最大の関心事であったため、個人ひいては地域社会全体の「使い分け」という現象には特に注目してこなかった。そこで、共通語化の過程における場面による使い分けがどのようなかを明らかにするために、さらには過去3回の調査で「ふつう何と言うか」と日常的な場面を想定して求め続けてきた回答が言語生活全体のうちのどの側面をとらえていたのかを検証するために、第3回調査の翌年の1992年（平成4年）に、会話状況に場面性を付与した「場面差調査」を実施した。調査全体の報告は国立国語研究所(2006)で行なっている。本稿では、その中から、得られた代表的な結果を紹介する。

2. 調査の概要

調査は1992年（平成4年）11月に実施した。

回答者は、前年度実施した「継続調査」と「パネル調査」の回答者の中から選んだ。継続調査は過去2回の調査結果と比較するためのものであり、回答予定者は住民基本台帳から無作為に（ただし年齢は調査当時15～69歳と限定した）500人抽出し、405人から回答を得た。一方、パネル調査は、個人レベルでの言語変化の有無を調べる目的で過去の調査の回答者を追跡調査するものである。市内で所在が確認された368人の回答予定者のうち314人から回答を得た。これらを合わせた713人（継続調査とパネル調査で重複する6人を差し引いた人数）の回答者の中から、調査に積極的である、回答までの時間が長くない等の条件に合致する222人を場面差調査の回答予定者として抽出した（継続調査の回答者112人、パネル調査の回答者110人）。これは、前年度に引き続き再度回答者になってもらうこと、また今回は場面性を付与した質問となるため調査時間がやや長くなると見込まれたことなどを考慮しての措置である。

回答予定者222人のうち実際に回答が得られたのは175人であった（継続調査の回答者87人、パネル調査の回答者88人）。抽出対象とした母集団（713人）がそもそも鶴岡市全体の縮図となっていないこと、また有意抽出であることから、回答予定者を抽出する段階ですでにランダム性は保証されていない。従って、以下に報告する調査結果の数値自体は、鶴岡市の状況を正確に反映しているとはいいがたい。しかしながら、場面間に違いがあるかないか、すなわち場面による使い分けがあるかないかは、得られた回答にも十分反映されていると考えられる。

175人のおもな属性は次のとおりである。

平均年齢は53.7歳である。継続調査の平均年齢が42.0歳であったことと比べると約12歳上昇している。平均年齢が61.5歳のパネル調査からの回答者が約半数いることが要因として大きい。年齢層別の内訳は、10～30代が39人、40～50代が65人、60～80代が71人であり逆ピラミッド型となっている。

性別内訳は、男性83人、女性92人である。

出生地は、鶴岡市内が約 2/3 であり、その周辺の庄内地方まで含めると 8～9 割に達する。鶴岡市を中心とする庄内地方を地理的背景とする回答者が非常に多い。継続調査の回答者と比較すると、平均年齢が高い分、鶴岡市内の数値がいくぶん高くなる。

調査に要した時間は平均53分であった。継続調査が平均33分であったことと比べると20分長かった。

調査項目のうち音声に関する項目は、音響分析ソフトを用いて分析する項目を除き、事後筆者が録音テープを聴き取ることによりデータ化した。それ以外の項目は、各調査員が現場で回答を記録した上で、事後筆者の指示によりアルバイタが録音テープを聴き直し、調査票の記録と食い違いがあった場合は筆者が該当箇所を聴き直した上で回答を確定した。

以下、筆者が担当した音声項目にウェイトを置きながら、得られたおもな結果を紹介する。

3. 得られたおもな結果

3.1. 音声項目

音声項目には、音響分析ソフトにより母音イ・ウの中舌化を測定する項目があるが、ここではそれ以外の項目、すなわち筆者が耳で聴き取りデータ化した項目について、代表的な結果を紹介する。音声項目は分節音と単語アクセントに二分されるので、ここでも大きくその2つに分けて紹介する。

(1) 分節音—有声化・中舌化—

過去3回の調査で対象とした分節音をカテゴリ別に示すと次のとおりである。

- ①唇音化Ⅰ：共通語の[ka]を[kwa]とする発音。
- ②唇音化Ⅱ：共通語のハ行子音[h][ç]を両唇摩擦音[Φ]とする発音。
- ③口蓋化：共通語のセ[se]をシェ[ʃe], ゼ[dze/ze]をジェ[dʒe/ʒe]とする発音。
- ④有声化：共通語の非語頭の無声の破裂音・破擦音を有声にする発音。
- ⑤鼻音化：共通語の非語頭の有声の破裂音・破擦音などの直前に入り渡り鼻音を伴う発音。
- ⑥中舌化Ⅰ：共通語のア行以外の母音ウを中舌化する発音。
- ⑦中舌化Ⅱ：共通語のア行以外の母音イを中舌化する発音。
- ⑧iとeの区別Ⅰ：共通語のア行のエをイに近くする発音。
- ⑨iとeの区別Ⅱ：共通語のア行のイをエに近くする発音。

このうち場面による使い分けが顕著に見られたのは④有声化と⑦中舌化Ⅱ（母音イの中舌化）の2項目であった。有声化については「柿（カキ）」「猫（ネコ）」、イの中舌化については「辛子（カラシ）」「知事（チジ）」を調査したが、図5～図8の結果が得られた。

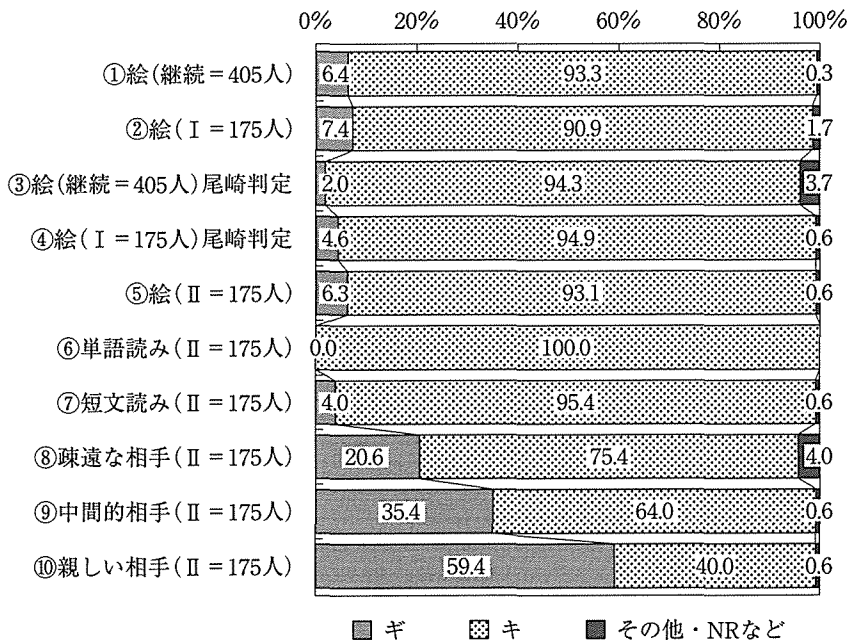


図5 「柿」のキの発音

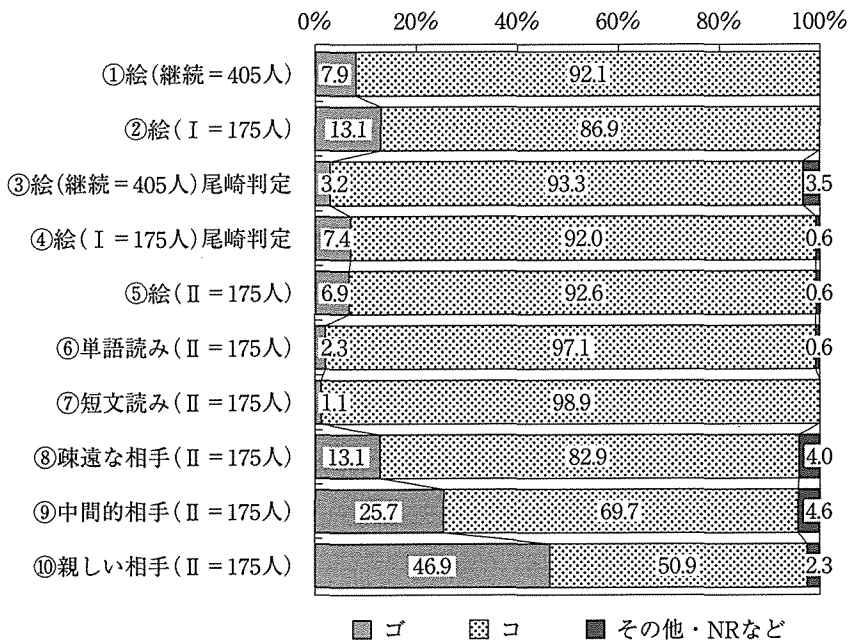


図6 「猫」のコの発音

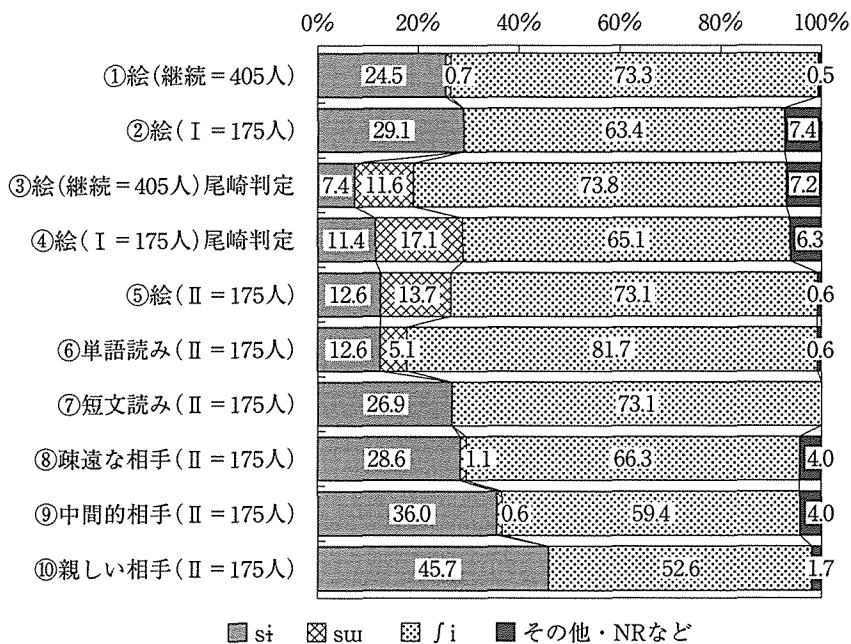


図7 「辛子」のシの発音

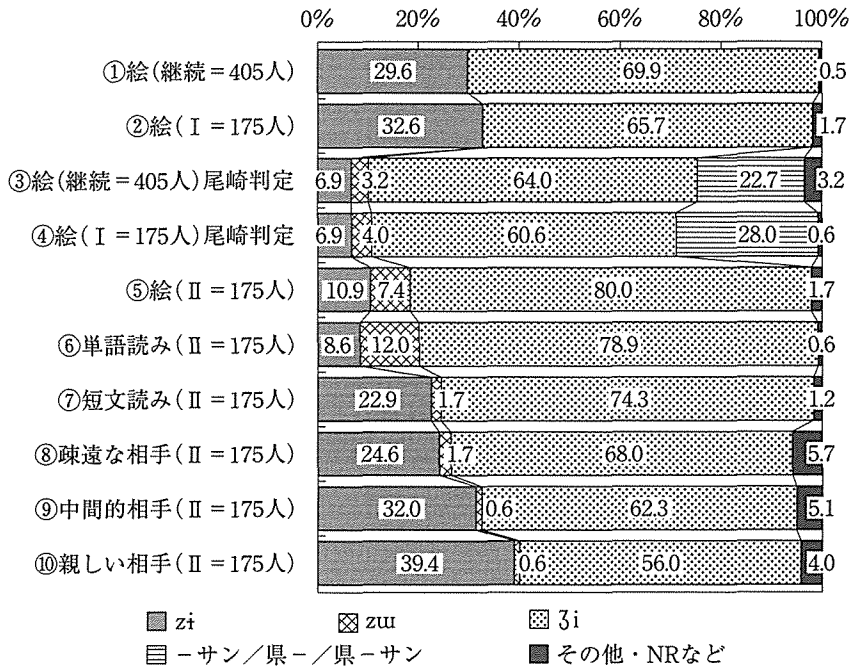


図8 「知事」のジの発音

グラフ中、縦に並べた①から⑩が広い意味での「場面」である。簡単に説明を加える。

⑤の「絵」とは、カードに描かれた絵が何であるかを回答させたり、なぞなぞ式に事物を回答させた際に得られた発音である。これは過去3回の調査で用いられた調査方法である。⑥の「単語読み」とは、カードに書かれた単語を読んだときの発音である。⑦の「短文読み」とは、その単語を含む短文（新聞の見出し記事という想定）を読んだときの発音である。⑧～⑩は、その短文を自分の言葉で（ただし当該の単語は含む）他者に伝えるときの発音である。⑧の「疎遠な相手」とは東京から来た初対面の人物（＝場面差調査の調査員）、⑨の「中間的相手」とは地元の人だけでも初対面である人物（＝国勢調査員）、⑩の「親しい相手」とは家族や友達などであり、それぞれ設定した人物がその場にいるつもりで発話してもらったときの発音である。

一方①～④は第3回の調査の結果である。調査方法は⑤と同じである。このうち①が継続調査405人の結果であり、今回の場面差調査により検証しようとする数値である。ただし、発音の判定は調査員26名が現場で行なったものであり、事後筆者が統一的に聴き取った場面差調査と条件が異なる。そこで、405人の録音を筆者が改めて聴き取り判定した結果を③として追加した。また、先に述べたように、継続調査の回答者は住民基本台帳から無作為抽出したのに対し、場面差調査の回答者は継続調査とパネル調査の回答者の中から有意抽出したという違いもある。そのため①③と⑤以降は直接比較できるものではない。その間を埋めるために、場面差調査で回答者となった175人を抽出して前年度の結果を示したのが②（調査員26名の判定）と④（筆者の判定）である。この175人にはパネル調査の回答者も含まれており、継続調査405人だけから抽出されたのではない点は注意を要する。

図5・図6により有声化の項目を見てみよう。場面差調査の⑤「絵」、⑥「単語読み」、⑦「短文読み」ではほとんどの回答者が共通語音声を使っている。方言音声の使用者はごくわずかである。ところが、これを自分の言葉で伝える⑧⑨⑩になると、⑩以外は少数派であることに変わりはなく、方言音声の数値は明確に増加する。その数値も「疎遠な相手」＜「中間的相手」＜「親しい相手」という序列を示している。すなわち、単語を単独で発音したり短文として読む際に方言音声である有声音を使う人は非常に少ないのであるが、自分の言葉で伝える際は有声音を使う人も一定の割合はおり、その数値は回答者と近い相手になるほど増加する。特に⑩の「親しい相手」（家族や友達）では半数前後の回答者が有声音を用いている。気の置けない人と話をする状況では、現在でも有声音は普通に用いられていることがわかる。また、その結果として、場面による使い分けが明確になされていることもわかる。

さて、それではこれまでの調査でとらえてきた結果はどうであったかを見てみよう。同じ175人の回答の結果ということで場面差調査と直接比較できるのは②④や⑤であるが、有声音の数値はいずれも低い。最終的な検証対象である①や③の数値もそれとおおよそ同様である¹。つまり従来の調査（厳密には第3回調査）では有声音の使用のかなり低いところをとらえており、会話場面、特に近い者との会話場面では、現在でも有声音が普通に使われているという側面はとらえていなかったことがわかる。

数値はやや異なるものの、これと同様の傾向は図7・図8のイの中舌化（[si] および [zi]）

にも見られる。本稿では紹介を省略した母音イ・ウの中舌化に関する音響分析でも、「文章読み」に比べ「親しい相手」に伝える場面では母音イが中舌化することが確認されている。なお、筆者の判定による③～⑥では[su]も多少見られる。中舌化というよりも、「カラス」「チズ」と完全にウで発音するものである。単語を単独で発話するため発音に注意がはられやすい「絵」や「単語読み」では、あいまいな中舌音を回避しようという意識が強く働き、共通語と異なるあいまいでない音で発音されたケースと考えられる。①②でこの数値がほぼゼロであるのは、調査票のチェック欄にこの選択肢がなかったことが要因として大きい（[su]が得られた場合は中舌音の[si]とチェックされた可能性が高い）。

この有声化と母音イの中舌化以外の音声項目は、どの場面でも方言音声の使用者は非常に少なく、したがって場面による使い分けも特に認められなかった。これらの音声は、現在では、言語生活全般において消滅寸前の音声であると言える。第3回の継続調査で得られた数値は、これらの音声について言えば、結果的に、生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。ただ、これらの音声も、第1回調査、第2回調査の時点では方言音声の数値も小さくなく、当時であれば場面による使い分けが行われていた可能性はある。

(2) 単語アクセント

単語アクセントにも使い分けが認められた。特に、共通語アクセントが頭高型（HL(…)）、方言アクセントが非頭高型（LH(…)）という組み合わせにおいては使い分けが明確に認められ、それは外来語にも及んでいた。そのパターンである「猫」「窓」「烏」「テレビ」の結果を示すと図9～図12のとおりである。なお「窓」は、継続調査では分節音（入り渡り鼻音）のチェックのみなされており、アクセントはチェックされていないため①②のデータが欠けている（筆者による判定は行われている）。

グラフの下方の場面になるほど方言アクセント（凡例では先頭のLH(…)）の数値が高くなる傾向がどの項目にも認められる。単語アクセントは、文節音と比べると、「絵」や「単語読み」でも方言の数値は比較的高いのであるが、自分の言葉で他者に伝える場面では数値はさらに上昇し、共通語アクセントと互角ないしは多少まさっている。特に「親しい相手」では、どの項目でも、方言アクセントの方が共通語アクセントよりもはるかに数値が高い。場面による使い分けを伴いつつ、方言アクセントは現在でも普通に使われていることがわかる。方言アクセントの数値は、従来の調査（厳密には第3回調査）でもそれほど低くなかったのであるが、今回の場面差調査によれば、それ以上に数値が高い場面もあり、そこはとらえていなかったことになる。

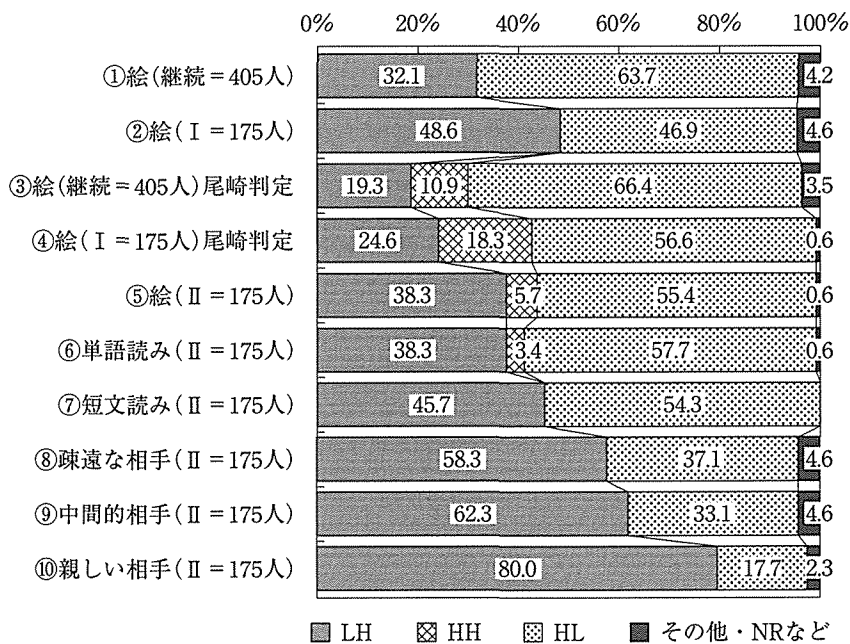


図9 「猫」のアクセント

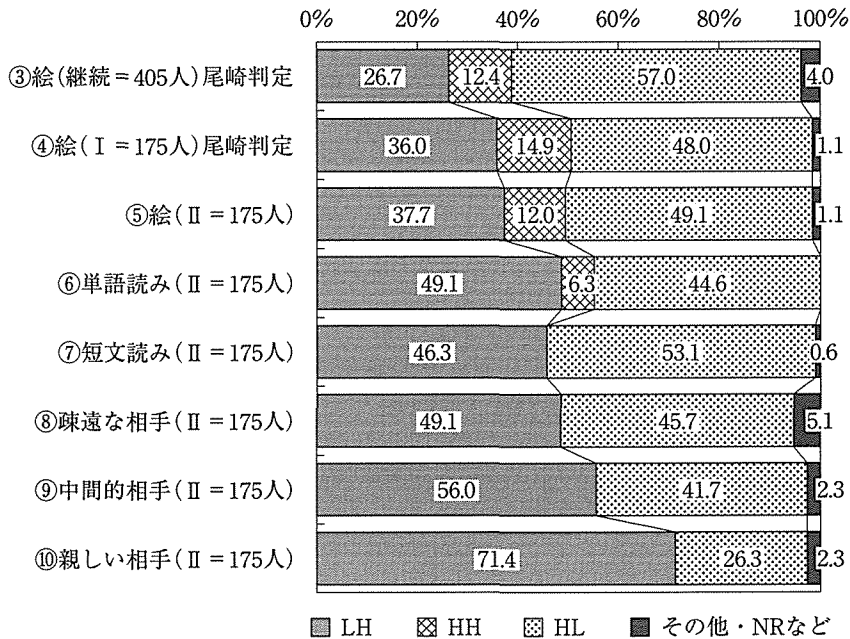


図10 「窓」のアクセント

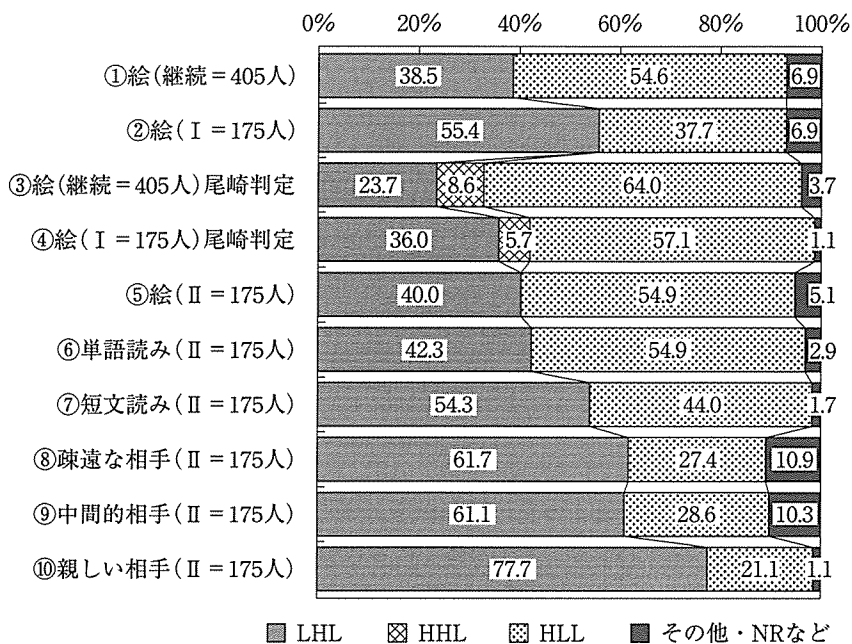


図11 「烏」のアクセント

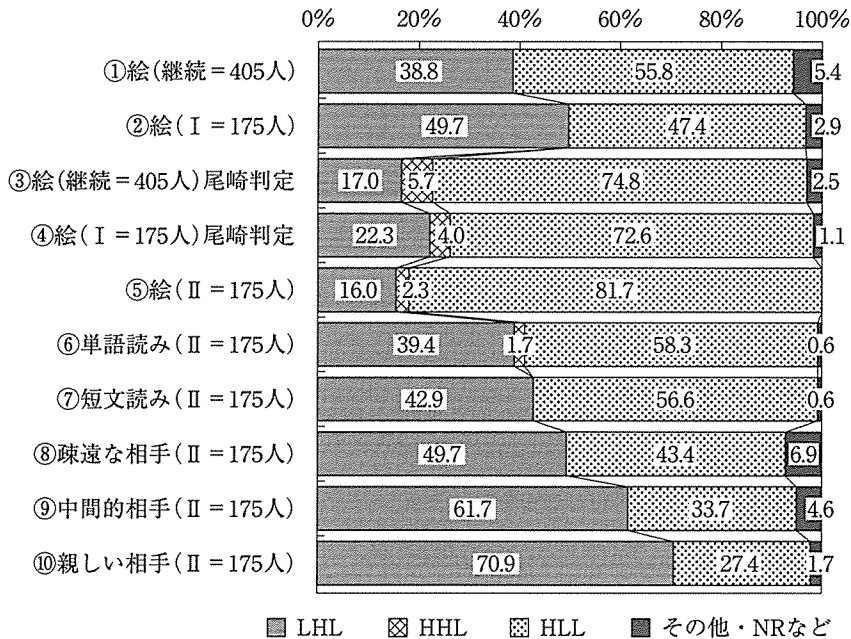


図12 「テレビ」のアクセント

(3) 分節音と単語アクセントの関係

「猫」では分節音（コの有声化）と単語アクセントの両方をチェックしているが、その関係がどうであるかを見てみよう。それを示したのが図13である。

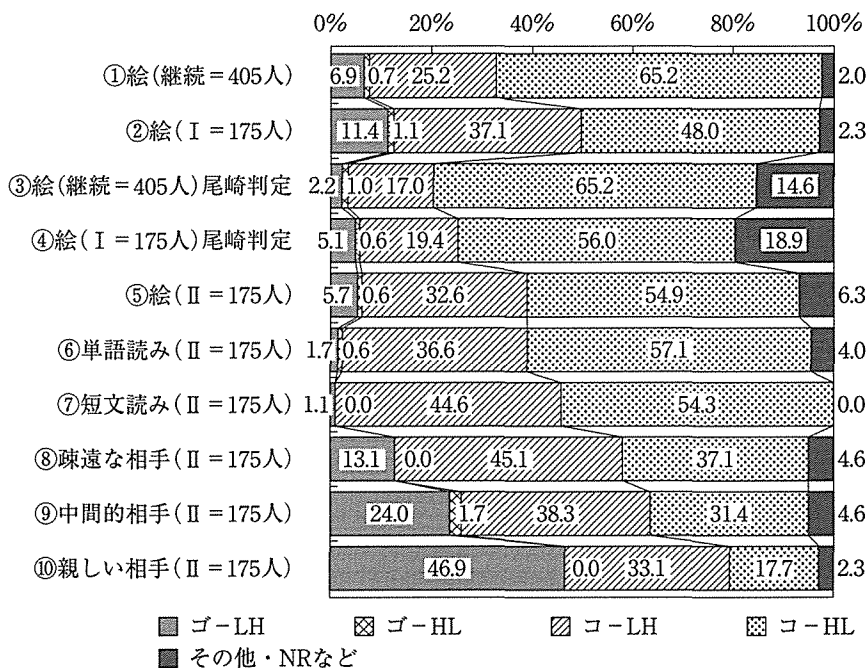


図13 「猫」のコとアクセントの関係

まず、分節音がゴと発音されたときのアクセントを見てみよう。「ゴ-LH」と「ゴ-HL」を比べると、「ゴ-HL」はほとんど見られず、実際に観察されるのはほぼ「ゴ-LH」だけである。つまり、分節音がゴと発音された場合は、アクセントはLHにほぼ限定されるのである。分節音がゴと発音されてアクセントがHLとなることは現実にはほとんどない。分節音もアクセントも方言形である「ゴ-LH」という発音は、場面差調査で見ると、⑤～⑦では数値が非常に低い、他者に伝達する⑧以降では数値が上昇する。特に⑩の「親しい相手」では5割近くに達する。

一方、分節音がコと発音されたときのアクセントを見てみよう。「コ-LH」と「コ-HL」を比べるといずれもよく使われていることがわかる。⑤～⑦では分節音もアクセントも共通語の「コ-HL」が優勢であるが、他者に伝達する⑧以降ではむしろ「コ-LH」が優勢となる。ただし、⑧以降では「ゴ-LH」の数値が伸びてくるため、「コ-LH」が最高値をとるのは⑧の「疎遠な相手」においてである。

各場面における有力パターンという観点から見ると、⑩の「親しい相手」では両方言の「ゴ-LH」、親しくはない相手に話す⑧⑨では分節音のみ共通語の「コ-LH」、単語単独で発音したり短文を読む⑤～⑦では両方共通語の「コ-HL」、となっている。日常的な会話場面から遠ざかる

につれ、まずは分節音が共通語となり、次いでアクセントが共通語となる様子が見てとれる。

3.2. 語彙項目－「捨てる」のケース－

語彙項目については継続調査と重複する項目はなく、これまでの検証というよりも現在における使い分けを見ることを目的としている。

調査項目は「ご飯」「食べる」「こわれる」「捨てる」「いくら（物の値段）」などである。このうち「ご飯」「食べる」は、方言形／共通語形の違いに加え文体の高さの違いも関わる項目である。回答者には、会話の相手として「学校の先生」と「友達」の２種類（２場面）を想定させ、それぞれの相手に対し回答者自身どう言うか自由回答させた。ここでは「捨てる」の結果を紹介する。

「ステル」と対立する方言形として出現が期待されるのは、『日本言語地図』第２集の「捨てる」の地図（第62図）で庄内地方を中心とする分布が確認される「ウタル」と、東北地方に広く分布が確認される「ナゲル」である。このうち「ウタル」は、関東・甲信越地方を中心とする「ウッチャル」「ブッチャル」につながる語形と考えられる。結果は図14のとおりであった。

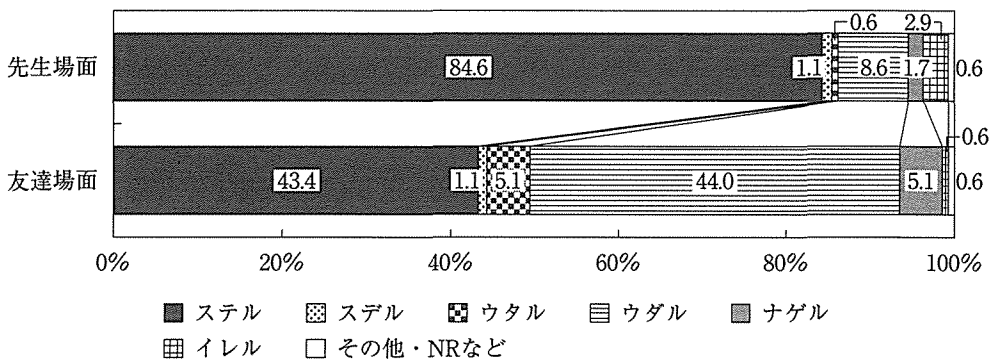


図14 「捨てる」にあたる表現

「先生場面」では共通語形「ステル」の数値が非常に高く8割を超える。方言形の中では「ウタル」のタが有声化した「ウダル」が最も有力であるが、数値は1割程度にとどまる。「先生場面」では基本的に共通語形「ステル」が用いられている。

これに対し「友達場面」では、共通語形「ステル」も約4割と少なくないが、「ウダル」もこれとほぼ同じ数値となり、両者が張り合う形となる。「先生場面」では共通語形、「友達場面」では方言形式と共通語形という使い分けが明確に認められる。

東北地方に広く分布する「ナゲル」の使用は「友達場面」でもわずかである。広域方言形により狭域方言形が飲み込まれるということは、少なくとも現在のところない。なお、「イレル」は、「ごみ箱にどうすると言いますか？」と質問したために得られた回答であり、本来的には「捨てる」の意味を持っていない。

3.3. 文法項目－「強かった」のケース－

文法項目（厳密には文法関係を表す語彙項目）は、方向を表す格助詞、原因・理由の接続助詞、形容詞連用形の語幹の形、過去回想を表す助動詞、終助詞などである。回答者には、語彙項目と同様、会話の相手として「学校の先生」と「友達」の2種類（2場面）を想定させ、それぞれの相手に対しどう言うか自由回答させた。ここでは過去回想を表す助動詞の結果を紹介する。

共通語では、文語のカリ活用に由来する系列の形容詞連用形は、例えば「強イ」が「ツヨ-カッ(-タ)」となるように、終止形からイを除いた部分を語幹とし、これに「-カッ(-タ)」を接続させる。これに対し鶴岡市の方言形では、カリ活用ではなくク活用を用い、しかもイまで含めた部分を語幹とする。ただし、連母音の融合も関与するため、語幹の実際の語形は「ツヨイ」ではなく「ツエ」ないしは「ツイエ」などとなることが少なくない。また、過去回想を表す助動詞は「タ」ではなく「ケ」が用いられる。そのため、「強かった」は、全体として「ツエ-ケ」「ツイエ-ケ」などとなる。共通語対方言という対立で言えば語幹の形も問題となるが、ここでは主としてそれに後接する過去回想を表す助動詞に注目し、共通語形「タ」が使われるか方言形「ケ」が使われるかを見てみよう。ただし、実際の回答は語幹を含む形でなされ、しかも「ツエ-タ」のような組みあわせは実在しないことを考慮し、語幹を含む全体の形で見ることにする。調査では、大相撲の力士の柏戸（または千代の富士）は「強かったなあ」と言う場合を調べた。結果は図15のとおりである。

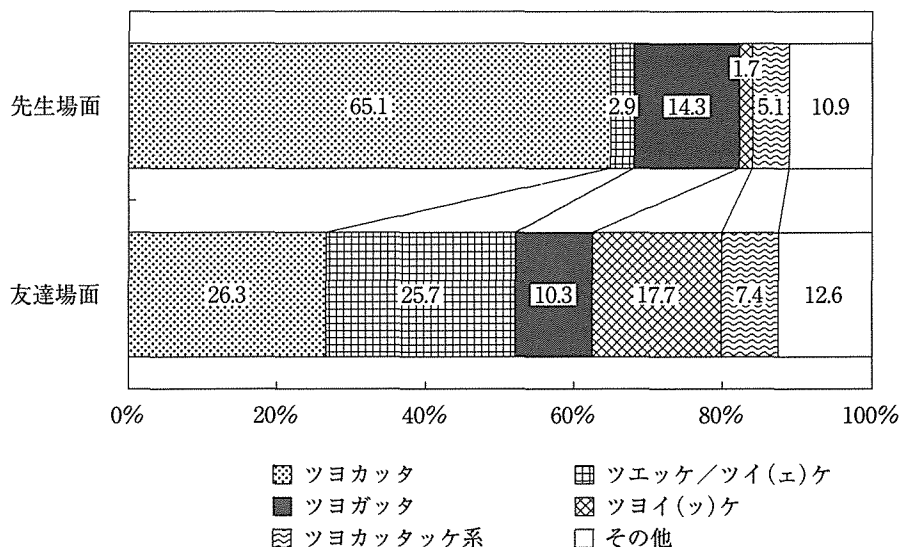


図15 「強かった」にあたる表現

「先生場面」では共通語形の「ツヨカッタ」が優勢であり全体の約2/3を占める。方言形としては、「ツヨカッタ」の音声的バリエーション（有声化）である「ツヨガッタ」が14%ほど見ら

れるものの、最も注目される「ツエッケ／ツイ(エ)ケ」「ツヨイ(ッ)ケ」といった「ケ」を含む語形の数値は非常に低い。「先生場面」では基本的に共通語形「ツヨカッタ」が用いられ、方言形が用いられる場合であっても音声的バリエーションにとどまることがわかる。

これに対し「友達場面」では、「ツヨカッタ」の数値は約1/4にまで縮小する（「ツヨガッタ」も同様に縮小）。これに代わって数値が増加するのは「ケ」を含む「ツエッケ／ツイ(エ)ケ」「ツヨイ(ッ)ケ」である。あわせると約4割となり、「友達場面」では現在でも比較的によく用いられていることがわかる。「先生場面」では共通語形、「友達場面」では方言形式と共通語形という使い分けがこの文法項目にも認められる。

グラフは省略するが、継続調査の結果はじつは「友達場面」の数値に近い。継続調査では「親しい友達に向かって言うとき」と指示しているので当然の結果である。逆に言えば、「先生場面」のような共通語がより用いられる場面は、継続調査ではとらえられていなかったと言える。

なお、数値は両場面とも1割に満たないが、「ツヨカッタッケ系」を用いる回答者がいることが注目される。おそらくこれは、「タ」と「ケ」が混交した形と考えられる。

3.4. 敬語項目

敬語項目は、玄関先に立っている人物に対し家の中に入るよう勧めるときの表現を求めた。回答者には、6種類（6場面）の相手を想定させ、それぞれに對しどう言うかを発話の形（文の形）で回答を求めた。ここでのポイントは、述部に方言敬語を用いるか否かである。分析もそこを対象とした。結果は図16のとおりであった。

他者に何かを勧めるという状況で用いられる鶴岡市の方言敬語はおもに2種類ある。ひとつは「入ッテクネヘン」のような「～クネヘン」である（動詞には「アガル」なども用いられるためグラフの凡例では「V＋クネヘン」とした）。これは、待遇表現と深い関わりを持つ授受表現の方言形であり、共通語の「クダサイ」に相当する。もうひとつは、「ハラヘ（入ラヘ）」「ゴザヘ」のような「～ヘ」である（凡例は「方言語形（ハラヘ・ゴザヘ）」とした）。この「～ヘ」は、共通語の「～ナサル」に相当する方言の尊敬助動詞「サル」の命令形「サレ」が「サエ」>「セ（シェ）」>「ヘ」と変化し、一般動詞「入ル」や尊敬動詞「ゴザル」に接続したものである。この他、動詞や補助動詞の命令形に下接する方言の終助詞として「(ッ)チャ」があるが（共通語の終助詞「ヨ」に相当）、これも待遇表現に関係する面があるのであわせて見ていくことにする。

グラフによると次のことがわかる。

全体としてよく用いられる表現は、「オ＋V＋クダサイ」（「オハイリクダサイ」など）や「V＋ッテクダサイ」（「ハイッテクダサイ」など）のような共通語の授受表現「クダサイ」を含む表現や、「V活用形（＋助詞）」（「ハイレ（＋ヤ／＋（ッ）チャ）」など）という動詞の命令形を含む表現であることがまずわかる。特に前者は基本的に共通語形そのものであり、あとで言及するように場面にもよるが、方言社会においても普通に用いられていることが確認される。

これに対し、補助動詞に方言形を持つ「V＋クネヘン」（「ハイッテクネヘン」など）や「方言語形（ハラヘ・ゴザヘ）」は数値が非常に低い。合わせても最大で1割強にとどまる。鶴岡市にお

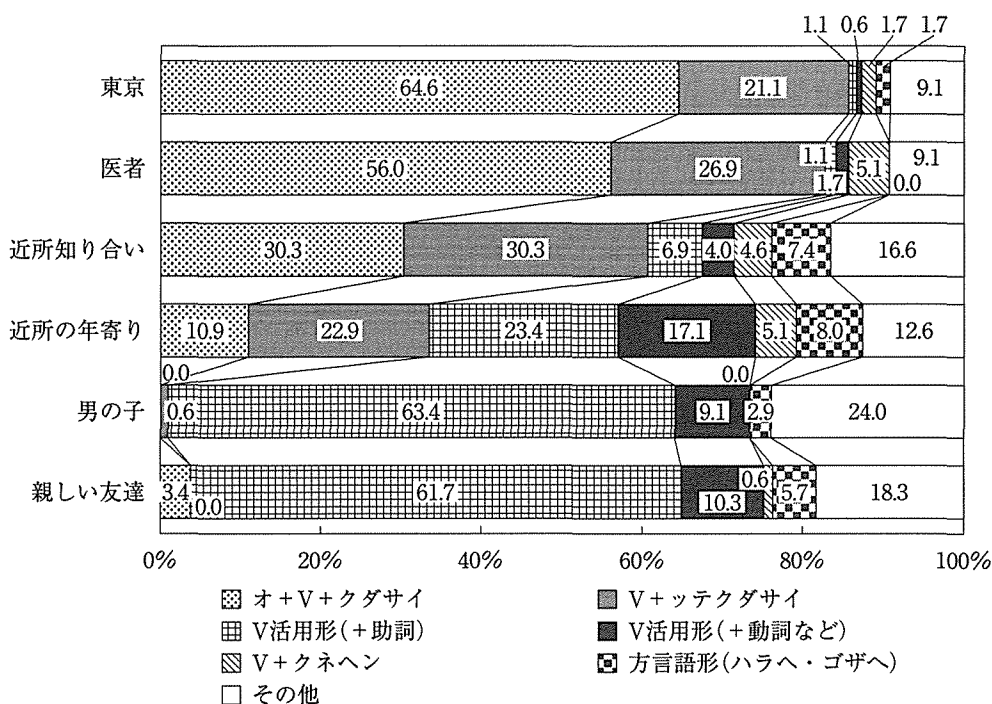


図16 「(家に) 入ってください」にあたる表現

いて方言敬語は現在あまり用いられておらず、用いられる場合でも補助動詞ではなく終助詞を方言形とする表現（「ハイレッチャ」など）であることがわかる。

主として共通語形の間でのこととなるが、場面による使い分けが顕著に認められる。

共通語形の「オ+V+クダサイ」や「V+ッテクダサイ」は「東京」（東京から来た見知らぬ人）や「医者」（医者または住職）で用いる人が多い。次の「近所知り合い」（顔を知っている程度の近所の人）もどちらかと言えばこれに近いが、非常に丁寧な「オ+V+クダサイ」は大きく減少し「V+ッテクダサイ」と同じ数値となる。「近所の年寄り」（近所の顔見知りの年寄り）はバラエティに富む。「オ+V+クダサイ」の数値はさらに減少し、代って「V活用形(+助詞)」や「V活用形(+動詞など）」（「ハイッテ(-イケ)」など動詞の連用形を含む表現）などが数値を伸ばす。「男の子」（小学校1年生くらいの近所の顔見知りの男の子）や「親しい友人」（同年配で同性の親しい友達）では「V活用形(+助詞)」を用いる人が非常に多く、「オ+V+クダサイ」や「V+ッテクダサイ」を用いる人はほとんどいない。

方言敬語が相対的によく用いられるのは「近所知り合い」と「近所の年寄り」である。地元の高齢者や少し距離を置くべき人物を中心に用いられる傾向が見られる。

4. まとめと今後の課題

以上、得られたおもな結果について言語要素別に見てきた。場面に関わらず方言形がほとんど用いられない項目では、当然ながら使い分けは見られないが（例えば音声項目で言えばセ・ゼをシェ・ジェとする口蓋化音）、多少なりとも使われている項目では、方言と共通語の使い分けがいずれの項目にも認められた。方言と共通語の使い分けは言語要素全般にわたって行われていることが確認された。

継続調査の検証という点については次のことが言える。音声項目は、「ふつう何と言うか」と質問しながらも、場面による使い分けが見られる項目については、方言音声の使用が少ないところをとらえていた。一方文法項目は、方言形の使用が多い場面をとらえていた。

今回の調査では、場面による使い分けを見るために、多くの設問では、こちらで設定した会話場面を回答者に想定させ、その場面にいるつもりで発話してもらい、これをデータとして分析した。つまりロールプレイであり、この種の調査ではよく用いられる調査手法である。得られた結果は概略実際の言語使用を反映していると推測されるが、しかし厳密に言えば日常の言語使用そのものをとらえたわけではない。回答者の言語使用意識を通してとらえたのである。多人数から短時間に効率的にデータを得るためには効果的な方法ではあるが、言語使用の「実際」をとらえるためには、自然談話もあわせて収集・分析することは重要である。充実したデータ量を確保するためにはさまざまな困難が伴うが、使い分けの実態によりせまるためには重要なポイントであり、今後の課題である。

注

- 1 有声化の数値が①>③, ②>④となっているのは、調査員26名の有声化の判定の平均 (①②) よりも筆者の判定 (③④) の方が厳しい傾向にあったためである可能性が考えられる。また、数値が②>①, ④>③となっているのは、場面差調査の175人 (②④) にはパネル調査からの回答者が含まれていて継続調査の405人よりも平均年齢が高くなっているためと考えられる。後出の図7・図8のイの中舌化や、図9～図12の方言アクセントについても、これと同様のことが言える。

参考文献

- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究所報告2 言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』秀英出版
- 国立国語研究所(1953)『国立国語研究所報告5 地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—』秀英出版
- 国立国語研究所(1967)『国立国語研究所報告30-2 日本言語地図 第2集』大蔵省印刷局〔現国立印刷局〕
- 国立国語研究所(1974)『国立国語研究所報告52 地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』秀英出版
- 国立国語研究所(2006)『方言使用の場面的多様性—鶴岡市における場面差調査から—』(内部資料)
- Yoneda, M.(1997) Survey of standardisation in Tsuruoka, Japan: Comparison of results from three

surveys conducted at 20-year intervals. 『日本語科学』2, pp.24-38

尾崎 喜光（おざき よしみつ）

国立国語研究所研究開発部門

190-8561 東京都立川市緑町3591-2

yozaiki@kokken.go.jp